石井勲の漢字教室

4 親こそ最良の教師

I 親こそ最良の教師



第3章 脳障害児の漢字による訓練法

ー バニーの記録

はじめに

この項では、イギリスの国営放送で放映された記録映画のシナリオを紹介します。脳障害児バニーがドーマン博士の指導を受け、その方法を実践することにより、次第に回復に向かっていく過程が記録されています。

私は、この映画をアメリカにおける発表会で観て感激しました。それで、その上映に当たっていたバニーの父親にお願いして、このフィルムを購入しました。

この翻訳は、山梨大学教育学部で特殊教育を担当していらっしゃる飯田貞雄教授のグループに、このフィルムをお貸しした際、頂戴したものです。

第2巻の初めの部分に、〝這い這い〟のパターン学習訓練の場面がありますが、これが一番重要なも

のです。

〝百聞は一見にしかず〟で、その方法は、この映画を見ればだれでも直ちに理解できますが、なかなか説明することは困難なのが残念です。

第一巻 反復訓練

母



母

この子はバニーです。彼は5歳で、生まれながらのひどい脳障害児です。彼は私達とは別の世界に住んでいます。

母　　母

バニー、とてもいいですよ、バニー、そうですよ。とてもいいよバニー、バニー上を見なさい。こちらに来なさい。ネー、言ってごらん、とてもいいよ、ネー、

――

来てごらん――

（音楽）

彼の見方は違います。感じ方も違います。そして聞き方も違います。

彼は予定より三か月も早く生まれました。生まれた時は、三ポンド（一三六〇g）ですぐに二ポンド九オンス（一一六二g）に減りました。その時の彼は、生きられる見込みはほとんどなく、そこで、すぐ保育器に入れられて、三か月間入っていました。彼は何もしませんでした。でも私はとにかく、赤ん坊のことは余り知

母

らなかったので、全然そのことは予期してませんで した。七か月ぐらいになっても、まだ座ることができませんでした。ただ目がピクピク動くだけでした。その間医者にかかっていましたが、医者たちも、どこも悪いとは思っていませんでした。でも、地方の小児科医が頭のサイズをはかった時は、大きすぎると判断しましたが、私は早産の子供たちの頭は大きいと思っていました。そして彼はいろいろ実験をした結果、頭の中に、脳液が入っているのではないかと言われました。その理由は、生まれた時、脳の中で出血をしたからではないかとのことでした。その出血のため、脳から出ている管がつまってしまって、脳の中に液がたまるのではないか、とのことでした。

医師たちは、身体にその液を戻すために、手術をしたいと言いました。彼は九か月の時、病院に入り手術をしました。そして手術後、家へ帰りましたが、彼は実際に少しも進歩しませんでした。一年過ぎても何にも超こりませんでした。

（バニー が寝て いる）

バニーを新しいセンターへ連れて行くと、教育心理学者が三角とか丸で調べ、物理的療法士もいろいろ調べて、体の右半分にけいれんがあると言われました。一日中いろいろと実験をしたあと、あなたの子供は脳障害ですと言われました。

私は、どうしたらよいのかと聞きました。そして、一日たって、もし、その気があるなら連れてきてもいいですよ、と言われました。私は家へ帰りましたが、彼は相変わらず進展しませんでした。まるで何もなかったように、全然変わりませんでした。私とバニーの目とは視線が合いませんでした。私は彼をひっぱたきましたが、彼はしゃべりもしなければ歩きもしない。ほとんど座りもしませんでした。その時、私はスペインの友人から手紙を受け取り、その友人の友達の子供も脳障害を持っていることを知りました。その子はフィラデルフィアに行って、新しいプログラムで良い進歩をみせているので、私にもバニーを連れていくように

母

母

ユージン・スピッツ博士

奨めてくれました。バニーのために、とにかくやってみるようにと言われました。フィラデルフィアのどこに行っていいかわからないので、脳外科のユージン・スピッツ氏に連絡しました。彼は、〝這い這い訓練〟の方法を進展させたグループの一人です。でもバニーを〝這い這い訓練〟について実験する前に、もう一度手術をしなければならなくなりました。

手術の時、わかったことは、最初の手術の時入れておいた管が故障して、頭から脳液が身体に戻っていませんでした。そしてCTスキャン（コンピューターによる断層撮影）で調べた結果、バニーの脳に災症のあとと、出血の時の傷跡があるのがわかりました。装置で調べた結果、これは子供が一歳になる前に発見していれば、方法もあったのです。七か月の手術の時気づいていたならば、傷跡や炎症を取り去れたでしょう。しかし、二歳ぐらいになってしまった今では、その子に傷跡がついてしまっていて治せません。

バニーは三か月病院にいて、家に戻ってきました。そして、七〇年の二月に、主人が、バニーをフィラデルフィアに連れて行きました。そして、一週間いろいろセンターで調べ、初めのプログラムに入り、家に戻ってきた時、生まれて初めて、三歳半になってやっと視線が合いました。五週間ぐらいたって、彼は私達を見て手を出すようになりました。そしてその時から、私達は、このプログラムについて、本当にやってみること にしました。

（音楽）

バニーに一年間ほど、プログラムについてやらせてみました。そして、七一年の三月に、私達はバニーをフィラデルフィ アにまた、連れて行き、いろいろの評価をしました。このフィラデルフィアは、脳障害児の手当てをして、進歩させる場所でとてもすばらしい結果を残しているのです。世界各国から、親子が沢山来ます。そ

してみんな同じような悲しい話をします。

誰も私達を助けることができなかったと。そしてまったく希望がなかったと。

アイルランドから、母親たちが集まり、その人達も同じようなことを言います。

女性 1　たまには言葉を言うような真似をしますが、それだけです。

女性 2　今、いちばん心配なことは、子供たちの将来についてです。これからどうなるかということです。

女性 3　専門家が、「十四か月かかっても、彼女は頭があまりよくならない。彼女の頭は小さい。脳が小さいから」と言いました。ひどいですね。

女性 4　もし、脳が悪い子がいたらどうしたらいいのでしょう。希望も何もないじゃないですか。

女性 5　私は一週間たってから、デビットを迎えに行った時、お医者さんに、「何かわかりましたか」と言ったところ、お医者さんは、ファイルを見て、「あなたの子は脳障害です。一生治りません」それだけでした。

グレン・ドーマン博士　脳が進歩するということは、ダイナミックに発展をしていくプロセスです。ただだれの脳も進歩するとは言えません。十二歳の子供がいて、ただ十二年間も、この世に存在しているとしても、体とともに頭も発達するのでなければ、生まれた時とまったく変わらないことになります。

これを一寸考えて下さい。この世のすべての病気について、時間をかければその病気は治ります。かぜをひいていても、時間がたてば治ります。盲腸も同じです。時間さえあればいいのです。

言語訓練教師

でも、脳障害の子供にとって、時間はかえってマイナスです。何故か――脳障害は、一日でも早く治らなければ、その子は一日歳(とし)を取ってしまうことになるからです。ここにいらっしゃるお母さま方、そう思いませんか。「二年間たったら、連れてきなさい」と言われたら、みなさん、気狂いのようになるでしょう。

二年間遅れたら、どうなると思いますか、二年間たった普通の子は、二年間進みますが、脳障害の子供は、二年間分遅れます。わかりますか？

また、彼は普通の子と同じ体をしていますね。でも、遅れています。脳の進歩は、止めることもできますし、ゆっくりさせることもできます。それほどひどくない障害児のことを考えて下さい。彼は、八歳になっても、四歳の知能しかありません。この進歩は、四年 分遅れてはいますが、止まってはいません。この進歩が、止まっているなら、ゆっくり勁かすこともでき、ゆっくり進歩しているなら、もっと早くもできます。止めるのでもなく、ゆっくりさせるのでもなく、早めるのです。それができなければ、私たちの仕事に意味がなくなってしまうことになるのです。

でも、十歳の子が一歳の知能しかなかったなら、普通の進歩では、十一歳の時、その子の知能はたった二歳です。一二歳の時には、たった三歳です。これではいけません。もっと早く脳を進歩させなければいけません。むずかしい問題です。では、どうしたら早くさせることができるでしょうか。

ここでやることは、視聴覚両面にわたり、継続的に、もっと判断を強くし、もっと刺激を強くし、もっと数を増やし、長さを長くすることです。

バニーのような障害児は、普通の子の進歩を、何回も繰り返さなければならないし、しかも一人一人のプログラムを変えて進歩させなければなりません。最初の大事なところは、普通の子の一年分の進歩をまねて、繰り返し、這ったり、歩くことをさせることです。そしてこの段階が一番大事です。ここでは、本国で見捨てられ希望のない子どもたちが、プ ログラムによって進歩しています。

：いいかい、みんな、読むんだよ。

母　脳障害の子供たちが、本を読む勉強をしています。

教師　（カードを見せて、子供達が読んでいる）

母　いいぞ、その調子だ。今日は、バニーがここのエキスパートの人たちから、身体検査を受けて、今までの進歩を見てもらいます。

医師（女）　とてもいいよ。

検査員（女）　そこにあるよ、とっておいで。いい子ね。

（音楽）

検査員（女）　他にある？

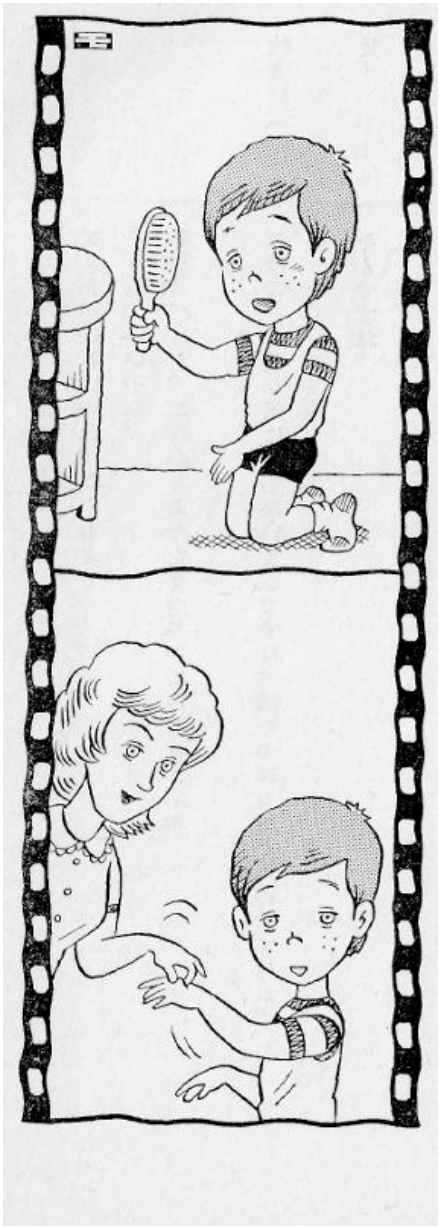
バニー、とってきて。

ブラシがほしいのね、これね？

そうね、いい子ね。

これからあなたをつねってみますからね。

このことを余り気にしてないようですね。強くつねっているのですけれど。



父　そうですね。

検査員（女）　彼の全体の感触はいいんですけれど、左手だけが悪いようですね。

父　そう。

検査員（女）　バニー、男の子はどこ？　男の子の写真はどこ？

男の子の写真をとって、お父さんに渡してね。

お父さんに渡して。

そうそう、よくできました。

（音楽）

眼科医（男）　バニー、こんにちわ、お母さん、今日はいかがですか？

ところで、最近のバニーはどうですか？

母　元気です。

眼科医（男）　じゃ、今日はバニーを見てみましょう。あそこにある電気を少し低くして下さい。

バニー、ここに何かあるか見てごらん。

見てごらん。

いい子だね。

じゃ、おめめを見せてごらん。

お母さん、よくなっているようですよ。嬉しいことですね。

（音楽）

栄養士（女）　一番よいビタミンCはローズヒップですけれど、とても高いんです。でもやはりそれが一番良いのです。錠剤でも、粉末にして飲んでもいいんですけれど、やはり、噛んで食べるのは良くないと思います。ビタミンCはとても強いので、歯には良くないからです。

母　そうですね。私も錠剤が一番いいと思います。イギリスでは他の形のビタミンCは手に入らないし、入るとしても百ミリグラムか百五十ミリグラムしか買えません。

栄養士（女）　そうですね。私もそう思います。でも液状のビタミンCもありますが、水と一緒に飲むから、子どもの体内に水分が多くなりすぎるので良くないと思います。まあ、それは簡単な方法ですけれどもね。

それと同様に、ビタミンBを飲んでもらいたいですね。ただ大切なのは、ビタミンBのそれぞれの種類、B1、B2、B6 をそれぞれ、同じ量だけ飲まなければならないということです。

（音楽）

検査員（男）　バニー、よくできたね。

違う、違う。こちらの手でやりなさい。

よし、できた。いいぞ、バニー。

バニーが何がほしいかわかったよ。

バニー、ほら、取りに行きなさい。

そうだよ、上手だね。あなたはそこにいて下さい。這わせますから。

父　いいですよ。

検査員（男）　ほら、バニー。お父さんが何を持っているか見てごらん。

バニー、反対を向いて、そうだよ。

バニーが這っているのを見て下さい。

よくできた。

お父さん、それを一つ上げて下さい。

じゃ、もう一回やらせてみますが、いいですか。

お父さんが何を持っている？

取りに行ってごらん。

そうそう。

どうしたの、這いたくないの。立って歩きたいの？

じゃ、歩いてみよう。

じゃ、バニー、歩いてみなさい。ＯＫ。

バニーは走ったことがありますか？

父　たまに走ります。

検査員（男）　そうよ、バニー。おいしいかい？

それが好き？

バニーが歩くとき、この右手はいつも上がっていますか？

父　はい、上がっています。

検査員（男）　バニー、またほしい？

バニーが歩く時、右足の指先で立たないでしょう？

父　そうですね。

検査員（男）　左足の指にさわったとたん、かかとをすぐ下ろすのでしょう?

父　はい、そうです。

検査員（男）　じゃ、私がいま見ているバニーの歩き方が、いつもの通りですね。

父　はい、そうです。

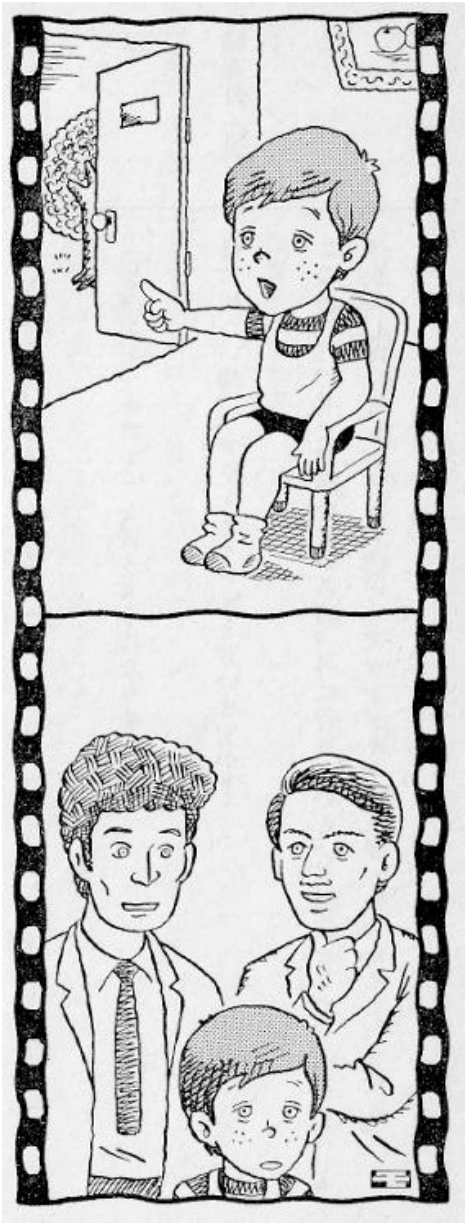
検査員（男）　大変、結構です。それから「ナーナー」と言うのを聞きましたが、「ノーノー」と言っているのでしょうか。

父　はい、そうです。それからもう一つ、「ゴーアウェイ」とも言います。

母　「ウァント モアー」と言うようになりました。

検査員（男）　外に出たい時、「アウトサイド」と言いますか?

父　このあいだ、ドアが開いている時、外に行きたいという動作をして、何か一言しゃべりました。もしかしたら彼が「アウトサイド」と言ったのかもしれません。



検査員（男）　でもそれは、確かかどうか、はっきりしないんですね。

父　はい、そうです。

検査員（男）　そうなるとバニーは現在、三つから五つぐらいの単語をしゃべれると考えられますね。ふつうに聞いた言葉では、わからないかもしれませんが、お父さんやお母さんとしては、バニーが必要としていることについてはわかりますね？

父・母　ハイ。

検査員（男）　バニー、きみは話し始めたんだよ。

（音楽）

検査員（女）　もうプログラムについてゆけるようになりましたか？ 慣れてきましたか？

父　そうですねえ。五分間について言えば、最初は五十種類くらいしか動作がなかったんですけれど、今では二百五十種類もの動作をします。バニーは、このパターンについて、とても慣れてきました。

母　バニー、手を見せて。

そうよ、いい子ね。

（音楽）

デラカート博士　月に人類を送ることができても、私たちには、子供に話す方法を教えることができません。複雑な技術的な問題について解釈することはできますが、人間を進歩させ

ることはできません。とても残念だと思います。

ある批評家たちは、私たちは自分では失望していながら、親たちにはいろいろなことを約束していると言っています。希望とは何かという問題は別として、現実を信じるか、信じないかが問題だと思います。まあ、それはそれとして、バニーは大きい音について、どんな反応を示すか調べてみましょう。

バニー、聞いてごらん、聞こえるかい？

好きなようだね。

バニー、もっと大きい音を出すよ。

好きなんだね、好きなんだね。

さあ、もう一度やってみるよ。

ああ、やっとバニーに通じたね。

もう一回いくよ、バニー。大きい音だよ、バニーは、大きい音が好きなんだね。

これからバニーについて、こういうやり方をしてみましょう。まず第一に、何か期待できるかもしれないので、刺激を与えてみます。いろいろな音を出して、耳には、よく聞こえないのか、聞こえすぎるのかわかりませんので、小さい音と、大きい音を混ぜて聞かせます。

ここで、お父さんとお母さんにも手伝って頂いて、お母さんが大きい声で話し、お父さんが小さい声で話し、それを繰り返してやってみましょう。

バニーの表情が変わったのが、わかりましたか？ なぜなのか、私にもよくわかりませんが。音が大きくて手でさえぎったり、音が小さくて耳を傾けたりするような子は、表情が変わります。

もう一回、やってみますから。バニーの表情を見ていて下さい。

これから私たちのすることは、彼の口から発せられる言葉を理解するような方法を、考えなければなりません。今やったことで、彼は音に反応することがわかりましたね。私たちがしなければならないことは、彼の言葉のコードをくずすことです。昔の話ですけれども、音しか口から出さないある男の人がいました。そしてここへ連

れて来られたのです。その時私たちは、その男に、「君が、我々の言葉を聞きとることができるということは知っているよ。ただ君は、我々に自分の意志を伝えることができないだけなんだと思う」と、言ったとたん、彼は安心した声を出しました。これと同じように、バニーは聞くことはできても、話すことはできないのではないかと思います。今までのバニーは、フレーズを受け取ることはできましたが、一つ一つの言葉はわかりませんでした。そして話すこともできませんでした。しかし、親として大体の意味は理解できるようになってきたと思います。彼に一言ずつ教え、言語能力を与えていけば、これから話すことができるようになると思います。特に、彼の口から発せられる音は、悪いとは思いません。ただ、話し方さえ変えればよいのだと思います。

検査員（男）　はい、何か御質問は？

これから以前の検査と比べて、どれだけバニーは成長しているかを見てみましょう。

この前の時と比べ、バニーは、まず歩いています。バランスは、まあまあな方だと思います。ただ右手の力、バランスもちょっと弱いですね。右手でつかむ時の手の力はとても弱いです。この点では、バニーはあまり成長していません。

次は言葉について。バニーは現在、三つから五つくらいの言葉を知っています。全体として見てみると、バニーの成長は決して悪くはありません。ただ右手の使い方を、左手の使い方のように成長させることですね。

ドーマン博士　お母さん、何か質問はありますか？

母　これからのことですが、バニーの成長をどう、うながしていったらよいのでしょうか。心配です。

こちらとしては、これからバニーに、読むことを教えたり、目でいろいろな新しいことを見させ、脳を刺激することをします。とにかく、バニーの受動能力と、能動

能力とに力を入れてやっていきたいと思います。これで、バニーに自信をつけさせる一つの方法となるでしょう。

ドーマン博士　今度来る時までに、バニーの言葉の数を増やし、もっ としゃべれるようにします。多動性を少なくさせ、バランスをもっとつけさせます。バランスといっても、ただこの地球のうえにバランスよく立っているというだけではなくて、バニー自身が、いつもどこにいるのかわかるようなバランスをつけさせることです。

バニー、君は質問はないか？

バニーは、ずっと集中して聞いていますね。そういう集中力を、私たちのパターンに反映させ、正しいか正しくないかをはっきり教える。それが彼にとって、一番有望になることでしょう。バニーの集中力はふつう児なみで、親たちが願っているようなものです。この集中力を利用して、それをさらに育て、自分で何かについて判断できるように教えます。

お父さん、お母さん、何か質問はありますか。

父・母　いいえ、ありません。

ドーマン博士　では、次の成長を調べるときまで、神とともにありますように。

第二巻 這い這いのパターン学習の成果

（車に乗って帰る）

母：バニーは、今日までよく成長してきました。この十か月の間、普通より二倍半以上も成長しました。これから私達は、新しいプログラムをもってロンドンに戻ります。

（這い這いのパターン学習訓練の場面）

母　バニーの機能回復プログラムのパターンを実行するためには、多くの人々の協力がなければうまくいきません。
この運動パターンによって、這い這いするパターンを脳に植えつけています。

（這い這い箱で実際に這う訓練をする）

父　おいでバニー、おいで。

母　さあおいでバニー。

（バニー這っていく）

父　おいで、さあ、おいでバニー。

母　いい子だね。
よくできたね、いい子だ（よ）。

（再びパターン学習訓練）

（バニー、おもちゃを持って遊んでいる。父親がバニーの足首に紐を結びつける）

母　この逆さ吊りは、バニーの脳に最もよい刺激を与える方法の一つです。

（父、ライトを持って来る）

母　この光を見てごらん。いい子だね。
今度は片足だよ。

母

さあ、今度はぐるぐる回すよ。
1、2、3、それ――。
1、2、3、それ――。

（再びパターン学習訓練）

（場面は変わって、バニーとお母さんが向かい合っている）

小さい僕は、どこから来たの？

僕のパパは、僕のことを何と呼ぶの？

このプログラムを僕が一生懸命やると、お母さんは僕を何と呼ぶかしら？

言ってごらんなさい。

グレン・ドーマン博士の声

じゃ、もう一度ね。小さい僕は、どこから来たの？

僕のパパは、僕のことを何と呼ぶの？

このプログラムを僕が一生懸命やると、お母さんは僕を何と呼ぶかしら？

言ってごらんなさい。

（会話は続く）

この会話による言語訓練は、親と子の約束を前提とします。お母さんが話す時はバニーが聞き、バニーが話す時はお母さんが聞いてあげます。この会話の内容は簡単なものです。

お母さんが、バニーが答えるような聞きかたをしてバニーに言わせる。二、三回それを繰り返して、最後にお母さんが、「できたら全部言ってみなさい」と言うと、バニーは、「お母さんは、私をバニーと呼んでくれる」と言えるようになりました。

母　母

（パターン練習の場面）

そろそろ終わろうね。しぶい顔してるね。バニー。

（這い這いの箱の中で）

母：バニー、こっちへ来なさい。

自分でやってみせてちょうだい、バニー。これは靴、これは口。クツと書いてあるカードを取ってちょうだい。

とてもじょうずにできた。バニー、これは風船て書いてある。これは髪の毛、バニーの髪の毛と同じよ。風船と書いてある のを取って。

これはかかと、こちらはトラック。かかとと書いてあるのを選んで。

バニー、よくできたね。とても賢いわね、バニーは。

こちらはスヌーピーと書いてあるよ。バニー。こちらはテーブル。スヌーピーと書いてあるのを取って。とてもよくできたわ。ほかにもっとやってみたい？

では、こちらは目と書いてある。こちらはトラクターと書いてある。トラクターはどちら？ よくできたわ、バニー。

一日はとても長いです。朝八時半から夜の七時まで、バニーはいろいろのことを習っています。これは一週間、一日も休まずやっています。バニーは、いろいろの体操をいろいろのテクニックで習っています。読み方、這い這い、歩き方、歯のみがき方、ぶらさがり方、ブランコにのること、階段を昇ったり、降りたり、パターンについて勉強したり、ジャンプしたり、それから特別に選ばれた食べ物を食べたり。

そして、これらのことをやって一番良いことは、バニーが喜んでやっているということです。

母　（列車の場面）

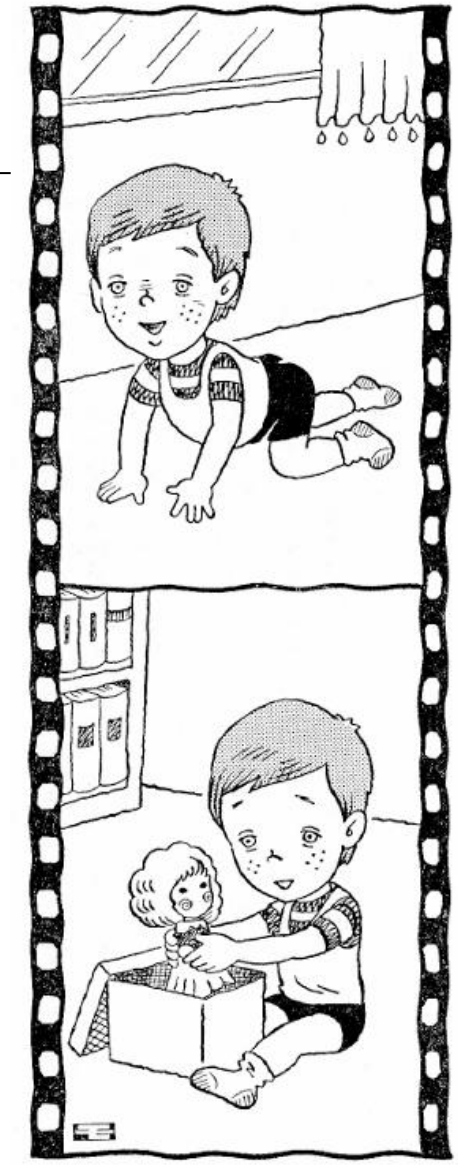
フィラデルフィアに行って三か月後、私達はカリフォルニアのスタンフォードにグレン・ドーマン博士を訪ねました。

グレン・ドーマン博士　バニーの成長は、今まではとても良いと思います。彼の体の成長も頭の成長も、よく進んでいます。

女性　バニー、これから這い這いをしてみよう。そう、もっと後ろから這ってみよう。おいで、じょうずじょうず。とてもじょうずだよ。私たちに、じょうずなところを見せてちょうだい。そう、お腹をもっと低くして……、じょうずだよ。

バニー、これを箱の中に入れてごらん。これを箱の中に入れてごらん。

それではバニー、この赤ちゃんを箱の中に入れてごらん。



母　バニー、手にいろいろのものがあるでしょう。お父さんはどれ？

そう、とてもじょうずね。じゃ、バニー、これからカードを読んでみようね。

バニー、ここに子猫がいるよ。そう、これはテレビ。子猫を取ってちょうだい。

そう、とてもじょうず。

（ドーマンはバニーの親に言いました）

グレン・ドーマン博士

親の立場からみれば、子供が一言ではなく、二つの言葉を合わせて言えるということは、まったくしゃべら なかった子が、初めて新しい言葉を習うことと同じです。今までの成長と未来の成長を合わせて、言葉を二つ合わせて言えるようになったことは、最も大きな進歩であると言ってよいでしょう。

バニーが、テープレコーダーで遊ぶということは、私には最も嬉しいことです。特にバニーは、自分の声をテープに吹きこんで、自分の声を聞くことを喜んでやっています。それは、バニーはもう、人と話したいという気持を出しているのと同じことなのです。ただ彼が話している言葉はとても少ないが、彼がしゃべりたいというところをみせていることが、私はとても嬉しいのです。

これでバニーが話すということが、よくわかりました。でも、バニーが言っていることは、言葉としては、わからないことがいっぱいあります。しかし、親としては、バニーが言っていることについて、自分から努力して、よく聞こうとしなければいけないと思います。

母

バニーは、そこでテープレコーダーで遊んで、自分の声がテープレコーダーから出てくるのを待っている、その姿を見ると、本当にとてもいい気持になります。

（博士の顔が写る）

昔から一つの諺があります。

勝っている時は、その方法を変えるなと言っていますが、私も同じくあまり変えない方がいいと思います。でも、たまには、一つや二つ方法を変えてやってみても良いと思います。

バニーは、三か月たって色々成長したとわかりますが、私達は毎日バニーと一緒にいて、バニーが成長しているということを、自分たちではっきり気がつかないことがあります。でもバニーは歩くことも、しゃべることもできなかった。這うことも

できないし、自分で食べることもできませんでした。そのバニーが、今歩くこともできるし、しゃべることも少しできるようになったし、そして、自分でごはんを食べるようになってきました。バニーは、自分でトイレに行くようにもなってきました。とにかくバニーは、自分で動けるようになってきました。昔はただ朝起きて、ごはんを食べさせて、おしめを取り替えて寝かすだけのバニーが、この短い間にこんなにも良くなったのは、とてもうれしいことです。今バニーは小さい男の子、好奇心を持ち、そして新しいものを習おうとしている、小さな私の子です。

2 創英教育研究所の記録

東京・武蔵野にある佐藤友泰氏の創英教育研究所における指導記録からそのほんの一部分を紹介します。

数十人に及ぶ子供たちの、数年にわたる観察と指導の記録が毎週積み重ねられて、膨大な資料になっています。

集団保育への疑問

私の研究所の障害児に対する教育法に対しては、同じように障害児教育に携わっておられる先生方にとって、大いに異論があると思います。障害児こそ集団保育の揚が必要であり、集団の場こそ障害児を発達させる所だという考え方は、全面的には否定いたしません。

それでもなお、集団の中ではどうにもならなかったという親の訴えを聞くにつけ、そして、そういう子供たちに一対一の場を設定して指導していく経過を見るにつけ、集団の中でなければ社会性が発達しないということは、誤りであると思うようになりました。

不幸にも、ある事故が原因で知恵が遅れ、言葉も出ず、年齢相応の身の回りの処理も充分でなく、社会性すら遅れている子供たちにとって、本当に集団の場だけが良いのでしょうか。ましてや、そういう子供たちに文字を教えるなんてとんでもない、という固定観念には、私は大きな疑問を持っています。



一対一の指導形態は、子供が育つ最も基本的な型であり、これが充分に与えられなかった子供には、将来大きな問題が生ずることが多いようです。

一対一の関係さえ充分に与えられなかった子供の多くは、集団に入れられると萎縮したり、人間関係を断ったり（自閉児）、愛情を求めるために粗暴になったり、一切無為で抵抗したり（自閉でない情緒障害児）、集団生活によって得るべきものがないばかりか、劣等感を強くして適応できない子供が多く、そういう子供が私の研究所に大勢訪れています。

そういう子供たちを受け入れて、一対一の関係で指導いたしますと、萎縮していた子供も、一切無為で抵抗していた子供も、反社会的だった子供も、殻を開いて社会的に適応を始め、完全に解決されないまでも、解決に向かって進むようになりました。

書かれた言葉＝漢字

文字は〝書かれた言葉〟ですから、逆に、言葉には、〝話し言葉〟と〝書かれた言葉〟との二つがあると考えることができます。そして、〝話し言葉〟が赤ちゃんの時代から与えられるように、〝書かれた言葉〟もまたごく自然に与えられるべきだと思います。

つまり、この二種類の言葉は、子供が関心を持つようになるのを待って与えるものではなくて、逆に、ごく自然に与えられることによって、子供が自然と関心を持つように仕向けるべきものだと思います。

言い換えれば、大人の立場から、どうしたら子供が興味を持ってくれるかを考えるのが、教育の正しい在り方でしょう。興味関心を持つまで待つというのは、決して正しい在り方ではないはずです。

教育者の中には、こういう考え方を否定する向きもあります。私は、〝話し言葉〟と〝書かれた言葉〟との違いは、それが耳から入るか、目から入るかだけの、つまり入り口の違いだけであって、どちらも同じ大脳で処理されるという、「石井・ドーマン方式」教育理論を信じて子供に対してきました。

その結果、教育者の批判をよそに、子供たちは見事にこれを吸収してくれました。そして、「石井・ドーマン方式」の教育は、子供の知能や言語能力のみならず、情緒の面においても、つまり、子供の全

人格的発達に対して、最も有効な教育法であると確信するに至ったのです。

石井・ドーマン方式の効果

「石井・ドーマン方式」の第一の効果は、情緒の安定が得られることです。研究所を訪れる障害児・問題児の多くが、情緒安定のよりどころを失って、不安そうにおどおどしたり、反発したりしていたのが、一対一のこの指導で、初めて情緒の安定が得られ、解決に向かいました。

それには、その子供の現在あるがままの姿、そのままを教師が受け入れることにより、その子供もまた教師を受け入れてくれるという前提が必要だと思います。子供の問題を余りに意識し、矯正しようと思って接すると、子供は抵抗することが多いようです。そういうことを忘れて、無心に〝書かれた言葉〟の指導に当たることです。

効果の第二は、言葉の定着が早いことです。その子供にとって、初めて教えられる言葉が、話し言葉と同時に〝書かれた言葉〟で与えられると、定着が早く、しかも確実なのは、視覚と聴覚との両器官が関与するためです。

アメリカの学者の研究によりますと、聴覚だけによる記憶を一とすると、視覚による記憶はその二倍、視・聴覚両方による記憶は五、六倍も大きい、と報告されています。

効果の第三は、言葉の発達に伴う人間性の成長です。人間は言葉によって物を見、物事を考えるのですから、言葉の発達が、人間性の成長を左右するのは当然です。

「この子には、わかる言葉がないのです」と母親に言われている子供でも、漢字を与えてその漢字が何を意味するかを教えてやりますと、直ちにそれを理解して、それを音読することはできませんが、漢字に対応する具体物を正しく示すことをします。これは、漢字が〝内言〟として働いていること、つまり、思考が働いていることを示していると思います。

効果の第四は、集中力がつくことです。これは、〝書かれた言葉〟が絵とは違って、物その物を直接に表現したものではありませんので、それを読み取るためには、注視し、頭の中で比較、分析、統合等の活動をしなければなりません。だから、自然と集中力がつくようです。

そこに、漢字カードを見せて、これを読ませるのと、絵カードを見せてそれを言わせるのとで、子供の頭の活動に違いがあり、従って教育効果の違いが生ずるわけです。

効果の第五は、前述の情緒の安定、言葉や集中力の発達、及びそれに伴う人間性の成長によって、知能が向上することです。漢字が読めるようになりますと、単に本が読めるということだけでなく、自分の周囲の事象をも、情報としてこれを吸収しよう、という態度までできてきます。

入所当時は、特殊学級か養護学校でなければと思われていた子供が、知能ばかりか各種機能も発達して、普通学級に入り、普通児と少しも変わることなく、各種の学習を進めている例がいくつもあります。

効果の第六は、発語指導に適していることです。子供に言葉を言わせようとする〝話し言葉〟だけの指導では、「○○と言ってごらん」というように強制になって、子供によっては抵抗して、言えるのに言わないことが多いのです。

研究所には、他の施設で言語治療を受けて効果がなかった、ということで訪れるものがよくあるのですが、そういう子供たちのほとんどは、強制による抵抗感を持った子供たちです。

そういう子供でも、漢字を覚えて、その覚えた漢字を「これなあに」と言って尋ねますと、まったく何の抵抗もなく、極めて自然の調子でそれを音読してくれます。だから、その音読を重ねることによって、発音も自然に正しくなっていきます。

効果の第七は、実はこれが最も大切なことですが、子供自身が、その気になってやろうとする意欲が一番大切だということを理解してくれることです。

「馬を川まで連れて行くことはできる。しかし、水を飲ませることはできない」という諺があります。教育のむずかしさはそこにあるのですが、この教育によって漢字が読めるようになった子供は、不思議なくらい意欲的に物ごとをするようになります。だから、それまで鈍かった目が、きらきらと輝いた目に変わります。

普通、○○療法とか○○訓練とか言われているものの多くは、せいぜい言いつけられたことに応ずることができるだけで、意欲的な子供を育てることはできないし、そういうところまで求めていないように思われます。

基本的な問題について、もっと書きたいことは多くありますが、紙面の都合で後日に譲ることにして、次に事例を上げたいと思います。

重度の脳性麻痺六歳児の例

昭和五十三年五月十三日

重い脳性麻痺の六歳になる子が入所しました。その時の観察記録には、次のように書かれています。

○ 言葉に対する反応が見られない。

○ 右半身は完全に麻痺。左半身がわずかに動かせる。お座りも十分ともたず、倒れてしまう。這うこともできない。

○ 物を直視することができず、瞳は左上方に上がってしまう。

○ この日まで、某病院の機能訓練と、市の障害児保育所で保育と言語治療を受けてきた。

（途中の経過については省略）

十月十四日（5か月め）

○ 名前を呼ぶと「アー」という返事が出るようになった。

○ 泣き声の出るアスクミー・カードを機械に通して泣き声を聞かせ、先生が「泣いてはだめです」と叱るような語調で言うと、じっと耳を澄ませ、真面目な顔で先生の目を見つめる。

○ 自分の名前の書かれているアスクミー・カードや、頭、肩、膝、足、お父さん、お母さん、姉たちの名前のカードをアスクミーに通すと、じっと見て、わかっている表情、身ぶりをし、「アー」と声を出す。

○ 「握手」と言われ、手を差し出されると、右手を持ち上げる。右の指が開いている。

○ まわりの人の目をじっと見て、その人の動きにつれて首を回し、注目する。

○ 教師が「頭、目、口」と言いながら、その部分に触れようと身構えると、明らかにその部分の接触を待つ動きが見られた。

○ 教師が「バイバイ」と言って戸棚の後ろに隠れると、目で追い、「バア」と言って出て来ると、声を上げて喜ぶ。

○ 「さようなら」と言われると、左手をバイバイの形で振って、母親の方へ手を伸ばした。

母親の話によると、指導開始後三か月日の八月ごろから、「この子の目が光って、生き生きしてきた」と、知り合いの人からよく言われるようになった、とのことでした。

十月の初めごろ、保育所で、某大学の言語治療の先生と、その母親との面接がありました。その時、母親が「私の言うことに対して、それに対する表情や動作から、この子は言われることがわかるようです」と言うと、その先生は、「この子にわかるはずがない」と主張して、譲らなかったそうです。

ところが、その時、その子は床の上に置かれていたのですが、三メートルも腹這いで前進し戸を押し開けて、声を上げて受持ちの先生を呼んだそうです。それで言語治療の先生は、「あれ、この子は二人の話が面白くないので、あそこまで行ったのかな。この子は言葉がわかるのかな」と初めて、そう言ったそうです。

漢字を指導する私どもには、それが言葉として発音できるずっと以前から、ちゃんと理解できることを知っています。どんな重障害児でも、漢字を理解でき、話し言葉は言えなくても、内言にはなっているという判断をしていますので、子供たちに対する姿勢も、自然と違うようです。

一般に、○○治療とか○○訓練とかと言われる先生には、専門的な技術の点では優れたものをお持ちの方が大勢いらっしゃることと思います。しかし、障害児教育に限らず、教育というものは、その方法がただ一つだけしかない、というわけのものではありません。

ある教育法は、とても有効だとしても、その用い方によっては、また、その子供によっては効果に違いも出るでしょう。また、それに、子供がその気にならなければ、私たちが期待するだけの結果は得られないと思います。そして私たちに、子供がその気になるだけの愛情と工夫がなければ、どんなに有効な方法も、まったく価値のないものに終わってしまうことでしょう。

Ｎ君の場合

Ｎ君は入所持の年齢、四歳二か月。言語障害を伴う知恵遅れ。某病院の診断によれば、脳波検査の結果、大脳の言語領域に異常があり、そのために言葉が出ないとのこと。ＩＱ 65。

異常に気づいてから、いろいろ治療を受けたが効果がなかった。どこの相談でも、来年の幼稚園入園までに言葉が出ないようでは、むずかしいことになるとのこと。言語障害のため、二人の兄とも遊べず、情緒面でも問題が見られる。……記録抜粋。

私はＮ君の両親に対して、次のように言いました。

「私は、Ｎ君が生まれてからまったく言葉を使わないできたということが、大脳の未熟という異常を



もたらす原因だったと考えます。だから、言葉が使えるようになれば、大脳も正常になると思います」

右の考え方の中に私の考える教育の基本的な姿勢があります。それは、子供の能力に限界線を引かない、ということです。

「このような子供は、これくらいにしかならない」という考え方を捨てなければ、その子の可能性を発見し、伸ばすという教師の姿勢は生まれないと思います。

もしも、「以前この子によく似た障害児は、いくら指導してもあのくらいにしかならなかった」というなら、「この子もあのくらいにしかならないだろう」と考えないで、「その指導法が悪かったからではなかったか」と、その指導法に原因を求めて、子供に原因を求めるべきではない、と思います。

「幼稚園入園までに言葉が出ないと、むずかしいことになる」という考えは、過去の経験から出た判断でしょう。私たちも、同じような経験をしてきた思い出はありますが、そういう考え方は、やはり限界線を引くもので、反省しています。

また、このように言われた親の身になってみますと、当然、焦りも出て来ますし、事実、焦った結果、N君が食事中、何か言葉らしいことを言ったということで、「もう一度言ってごらん」と親が強制し、そのため食事を皆中止して、N君の口元を凝視するという異常事態を招いたということです。

こうなりますと、N君はいよいよ黙否する態度を強めますし、以後の教育に大変な支障を招くだろうと思われます。このように焦りは教育には禁物ですが、その原因は限界線を引いたことにあるわけです。

それで私は、N君が話せるようになる時期を小学校入学時まで、二年先に延ばしました。そうすればまだ二年半あるということで、両親もゆったりとした気持になるだろう、と考えたからです。そして、「何としても言葉を出させよう」という気持を、すっかり捨て去ることまで希望しました。それは、良くしようと思えば思うほど、結果が悪くなることが多いからです。

五十年十月十七日

○ アスクミーにカードを通し、それらしく言う。帽子はボーシと言った。そして「チ、チ」と言う。「家にある」ということらしい。

○ 色紙で飛行機を折る。キイロという言葉ははっきりしている。現在までに言えた唯一の言葉。

○ 甘やかされているらしく、わがままで、集中力が不足。

十月二十四日

○ アスクミーを喜んでやる。カードを機械に通すたびにそれらしく言う。

○ 目、手、足、口のカードは、音読しながら体の部分とつなげる。

十一月一日

○ 目、手、足、耳、口のカードを見て、「メ、テ、ア・・シ、ミミ、クチ」と声を出して読む。

○ 象、犬、牛、馬、猫のカードを使って、読みながら取りっこをする。

○ 鼻と自分の名前のカードとをおみやげに渡してやると、大事そうに持って帰る。

十一月八日

○ 自分の氏名のカードを見て、一語一語発音できた。

○ 蟻、蜂、蛙、蝶、蝉のカードを音読しながら取りっこをする。特にこのカード取りは、注意力を必要とするが、抵抗も起こさず、むしろ楽しそうに遊んだ。

十一月二十一日

○ 両親の話によると、研究所へ来るのがとても楽しみで、来る時の目の輝きが普段とまるで違うと言う。

○ 体操しながら、「目、手、耳、口、足、鼻」を正確に言う。

○ 「ノソノソ、ピクピク、パクパク、ブラブラ、ピョンピョン」のカードを渡すと、熱心に見て、「これなあに」と聞き、先生の言う通り真似しようとする。

○ 自分の氏名はすらすらと言えた。

十一月二十四日

○ 「猫、鶏、象、豚」のカードを読んだり、当てっこしたりする。発音が大分はっきりしてきた。

○ 電話で一語文の会話をさせる。既習のカードを拡げて、先生と互いに読み合ってカードを取る競争をする。

○ 二語文への指導を始める。「僕の本、パパの自動車」の〝の〟の指導をする。

十二月五日

○ 父親が嬉しそうに話す。「家でN君が欲しがる物をやらなかったら、〝パパ、の、ばか〟と言ったので、家中皆で大笑いした」と。

○ 「電車、三鷹、相模原、自動車」のカードを読みながら取りっこをする。

十二月十三日

○ 接続語〝と〟の指導をする。「手と足、黄色と赤、白と黒、パパとママ、目と鼻、耳と口」言える単語を〝と〟で結んだのだが、全部上手に言えた。

○ 両親が「この子が言葉を言えるとわかって、本当に安心しました」と言われた。

十二月二十日

○ 「青いボール、赤いボール、黄色いボール」のカードと実物と比べ、投げたり、転がしたり受け取ったりして遊ぶ。

以上、二か月半、週一時間の指導で、かつて言葉が出ないと診断されたN君が、二語文が言えるようになったのです。こういう例は決してN君だけではなくて、言語障害の子供たち全部早い遅いの違いはあっても、言葉が言えるようになっていきました。従来の言語治療に対して大きな疑問を感ずる所以（ゆえん）です。

と同時に、漢字のようなむずかしいものを覚えたり理解したりするはずがない、と限界線を引かれて

いた障害児が、実は皆、この力を、普通児とまったく同じくらい持っていることがわかったことは、ほんとに嬉しいことでした。

「言葉が満足に言えないのに、文字の指導なんてとんでもない。指導には段階があって、言葉が先だ」とお考えになっている方が、ほとんどのようです。確かに指導は段階を追って進めるべきですが、その段階がどうも間違っていたようです。〝話し言葉〟よりも〝書かれた言葉〟の方がやさしいのです。

また、「言葉や文字よりも、先に身につけるべき生活習慣や集団の社会性がある」と言って、この教育を非難される先生がいらっしゃいます。本当にそうだと、心から信じていらっしゃるのでしょうか。お伺いします。

私の指導の経験では、生活習慣や社会性に問題のあった子が、言葉や文字を理解し始めるや否や、突然のようによくなっています。私には今の公教育は逆のことをやっているように思えてなりません。

以上が公教育の場に対する私の質問です。

五十一年三月三十一日

○「箸を持つ、ジュースを飲む、ズボンをはく、靴下をはく、服を着る」のカードを与え、アスクミーに通して言ってみたり、拾い遊びをする。

○ 童謡と関連させて、「兎、魚、雨、雪、象……」等十枚ずつのカードを、かるた取りの要領で取りっこをした。

三月二十七日

○「バスに乗る、おなかが空いた、雨が降ってきた、手を洗う、早くおいで」のカードをアスクミーに通して言う。

○ 日常会話には、大分不自由さがなくなった。

○ 幼稚園入園は断わられたとのこと。園長先生のお話では、情緒障害がその理由であるという。障害の判断の基準について考えさせられることである。

四月三日

○「お風呂、熱い、茶碗、箸、布団、寝る、枕、パジャマ」等のアスクミーカードを使い、ごっこ遊びをしながら読む。

四月十七日

○ 風邪を引いて先週休んだので、「病院、お医者さん、注射、薬」のカードを使って、N君をお医者さんにして病院ごっこをする。

○ お店ごっこをする。「ごめんください、いくつですか、ありがとう、さようなら」のカードを使って買い物ごっこ。

六月十九日

○ 父親の話によると、「今週一年ぶりで○○病院の検査を受けてきました。言葉が出て、ある程度会話ができるのに驚かれ、IQが85に伸びました。一年前の検査では特殊学校行きであったのが、普通学級でも大丈夫だと言われました」と。

○ たくさんの言葉が、とてもはっきりと言えるようになった



右のカードを読んで、いろいろ組み合わせて、正しい文にする。

○「熊、鶏、金魚、蟻、猿、蟹、蛇、兎、蝶、亀、鳩、蛙」等のカードで、かるた取りをする。

七月一日

○ 先週から三歳児の幼児教室に通う。元気に毎日行っているとのこと。

○ 指導中、自然に使った言葉。

「もう我慢できない、待ってて、電車でなく自動車、ごめんね、ママ早く帰ろうよ（指導後、母親と

教師の話が長引いたので）」

○ スズメの〝ス〟、ワンワンの〝ワ〟、カラスの〝カ〟等、最初の音がなかなか出ない。ワがアになって、ワンワンがアンアンとなる。

○ 言葉が大分言えるようになったので、家庭でも言わせることが多いせいか、研究所でも、言うことにちょっと抵抗があるようだ。親に無理に言わせようとしないよう、改めて注意した。

○ 「象、亀、蟹、蜂、蝸牛」のカードに、元の絵のあるマグネットを合わせて貼り、数を数える。

○ だるま落とし遊び。「赤、白、縁、黄」の文字カードと、色を合わせて、言いながら落としていく。

九月七日

○ 二語文で話すことが多くなった。「電車、乗って来たよ。お父さんと、来たよ」

十月九日

○ 市内の幼稚園に欠員があると聞き、簡単なテストを受けた結果、入園を許可される。

○ 母親の話。

「幼稚園に喜んで行き、帰るとすぐに遊びに行くようになった。友達と会話が交せるようになったので、友達もふえ、行動範囲も拡がり、性格ものびのびしてきた」

○ 先生との会話の中で言った言葉。

「暑いなあ、もう大丈夫、今度またやろうね、今度来たら、御飯もね、ママと電車で三鷹来た、まあだよ、さか（さ）ま、僕おばちゃん（先生）好き」

十一月六日

○ 入って来るなり、「三鷹、先生の夢、見たよ」と言う。会話に不自由がなくなり、相手の目を見てはっきり話すようになる。

十一月十三日

○ 平がなが大体読めるようになった。漢字も一音一音のように指を指して読み、変だなという表情

をする。

○ N君が読んだ最初の文。

「小さい白い鶏が、皆に向かって言いました。『この麦、誰が蒔きますか』豚は『いやだ』と言いました。猫も『いやだ』と言いました。犬も『いやだ』と言いました。小さい鶏は一人で麦を蒔きました。（以下略、原文通り）」

特別に平がなを一字ずつ覚えさせるような指導はいたしません。しかし、文字カードがたくさん読めるようになると、障害児でもどんな子供でも、自然と平がなが読めるようになります。

また文章になった場合は、どの平がなも読めるようになっていても、一字ずつだと読めない子がいます。それが、短時間の指導で、直ちに一字ずつでも読めるようになります。

文字の指導は、「あいうえお」一字ずつの読み書き指導から入るよりも、漢字を中心とし、平がな、片かなを合めた、意味のある〝書かれた言葉〟の読み方から入ることです。それが自然の姿であって、何の抵抗もなくよく覚えてくれるのですが、これがなかなか学校の先生方には、わかってもらえません。

N君は、この「小さな白い鶏」を、何の抵抗もなく、二十分ほどで読めるようになりました。

五十二年三月二十九日

○ 家から持って来た音読できるカード。

「親指、白い雲、ゆりかごの歌、刀で切る、松の木、神さま、寒い寒い、王様、右手を上げる、絵の具、象さん、交通信号、きれいな声、日本一、止まる、歩く、歩く牛、走る馬、太い首、電話で話す、青い目、動物、新聞を読む、力が強い、耳で聞く、大好き、お母さん、男と女、黄色い花、お当番、お父さん」計三十一枚。

以上、指導を開始してから一年四か月にわたる指導経過の概略を紹介しました。もうN君は小学校入学の能力は充分にあるのですが、五歳ですからもう一年待たなければなりませんでした。その一年間は、いろいろな本を読むこと、数の概念を理解させ、文字を書くことを習う等、当初の目的である言語指導以上の内容を学習し、それをこなしていきました。

しかし、問題として残ったことは、会話のイントネーションが完全にはならないこと、歌唱で音の高低表現ができないことの二つで、これはもう一年指導を早めていたら良くなったのではないかと思いま

す。

でも、小学校一年生になった現在では、それも大分良くなってきています。五十二年十二月の末、父親が、「毎年正月になると、親類の子供たちが大勢遊びに来るのだが、今まではこの子の言葉が通じないため、どうしても除け者になって、淋しい思いを親子ともども味わって来ました。けれども、今度の正月は、皆と一緒に遊べます。本当に正月が待ち達しい思いです」と言われました。

五十三年の正月は、N君の家にとって、それはすばらしいものだったと思います。

N君は、言語障害から来る知恵遅れと、そのため友達と遊べないという劣等感で、情緒にも問題がありましたが、一対一の指導の結果、比較的短期間に良くなりました。与えられた紙数の関係で事例もわずか、指導記録も抜粋ということで、「石井・ドーマン方式」についてのすべてのご理解はとてもむずかしいと思いますが、これでお許しを得たいと思います。

後日、機会がありましたら、「石井・ドーマン方式」を中心とする研究所の教育全般、また教育方法論や自閉児論など、もっと詳しく発表したいと思います。

3　公文数学研究会の記録

親こそ最良の医師

公文数学研究会の機関誌〝やまびこ〟に掲載されたものを、引用させて頂きました。公文会長に感謝申し上げます。

東京の工藤先生の文を読んで思いますことは、「一人の障害児が漢字を読んだということを耳にした親が、次々と三人も続いて申し込んで来た」ということです。親たちの求める気持のいかに強いかがうかがわれ、ドーマン博士の〝親こそ最良の医師〟という意味が、よくわかる気がいたします。

大阪の田中先生の文では、「覚えられる漢字をなぜ今まで覚えさせなかったのか、本当に腹が立ちます」「世間一般でも〝どうせできないだろう〟という先入観が、かなり根強いようです」という御意見、実践者だけが感ずるものであって、これが大きく広がった時、初めて教育が大きく変わるのだと思います。

「漢字カード」効果の証明

工藤美智子先生（東京〈深大寺教室）

あいまいな〝自閉症〟の規定

〝自閉症〟――ふだん私たちは、この言葉を安易に使っていることが多い。しかし、〝自閉症〟それ自体、原因も含めての正確な概念規定はなされていないのが現状である。症状の面から見ると、生活環境から派生する心理的、社会的要因の関りが大きい情緒障害のひとつに位置づけられるが、原因面から考えると、最近は否定的な傾向にあるという。むしろ、物を感じる、言葉を話す、という機能そのものに障害がある、一種の〝脳機能障害〟であるという説が強まってきている。

自閉症児のその特徴として、学校において実際の指導にあたられている高橋晃先生（東京・五本木小学校教諭）は、

(1) 孤立 (2) 固執 (3) 多動 (4) 言語発達の遅滞 (5) 興味・関心の偏り (6) 指示・禁止 (7) 自傷行為、パニック、奇声、独言 (8) 感覚認知の異常

を挙げ、教師として困惑する状況として、

① 勝手に行動し、集団に帰属しない。

② 興味や関心の偏り、固執煩向かあり、学習活動に参加させることが困難である。

③ 言語の発達が遅れ、その障害の特質とも相まって、言語による意志の交流がむずかしい。

④ 各種の異常行動や学校の内外の放浪、興味や関心の偏りなど、安全の確保がむずかしい。

と述べている。

〔第四回教育夏期大学（主催・日本心理適性研究所）情緒障害児教育講演会テキストより〕

このような自閉症児の特徴を示されると、通常、私たちが見ている〝上手にお話ができない〟〝お友達とうまく遊べない〟〝引っ込み思案で目を合わせることができない〟などという子供に自閉症と名づけてしまうのは、早急というものではないでしょうか。

ボランティア活動で知り合いに

毎週金曜日、K君宅へ工藤先生は出向く。午後二時、五人の自閉症児たちが、工藤先生の訪問を待っている。大判漢字カード、Ⓐ教材を使用してのマンツーマン指導、学習時間は一人十～二十分と短いが、

徐々にその効果が現われてきた、とお母さんたちは目を細める。

「昨年の四月ごろでしたか、調布市の福祉協議会から〝K君、Aちゃんという自閉症の兄妹に学習指導をしてくれないか〟という電話を頂いたのがきっかけなんです。以前、〝ボランティア――子供の学習〟と登録していたのを、きっと思い出されたんですね。

私はそれまで、教育夏季大学の〝情緒障害児教育〟などを受講していましたので、自閉症についてはある程度、わかっていたつもりだったのですが、いざ接してみますと、私の認識がいかに皮相なものだったか、イヤというほど、思い知らされました」

K君、Aちゃんの学習は目、鼻、口などが大きく書かれている漢字カードから。やはり、体の部分名称から入った方がより興味をひく、という。

しかし、じっと座っていてはくれない。自分の興味外のことには、なかなか関心を示してはくれないのだ。部屋の中を奇声を発しながら歩き回る。工藤先生の指導は、まず学習と取り組ませることから始まった。

「学習を指導する、というより、友人として、仲間としてつき合うことが、この子供たちとのふれあいのポイントだと思います。

でも一口にこう言っても、慈善でなく、同情でもなく、意気込んだ使命感でもなく、ごく自然な感情でこの子たちと接する、これは確かに難しいですね。私自身、なぜこのようなことをしているのだろう、単なる慈善行為じゃないか。イヤ違う。そんなつもりはない。などと悩むことが多いですし、今もってその繰り返しなんです。ただ最近、思い始めたのは、たとえ、どのような感情を思っていても、いつまでその子たちに接してあげられるのか、時間が私にその解答を与えてくれるのでは、と思うようになりました」



「障害児」にこそ漢字カード

Kのお母さんの紹介で、五十四七月T君、十一かS君、そ

して三十五年の一月にM君が、工藤先生の指導を受けることになった。各々のお母さんは「〝うちの子、漢字を読めるようになったし、名前も書けるようになったのよ〟とK君のお母さんの言葉に驚き、あわててうちの子もぜひ、とお願いしたんです」と口をそろえる。

五人の重度の自閉症と診断された子供たちの症状と学習状態は次のとおりである。

● K君＝小3　体は大きく、少々肥満型。言葉が不明確で、多少、乱雑な行動をとる。石井式の漢字カードから入り、現在、公文式の大判漢字カードとⒶ20。読める漢字が八か月で十五に増えた。

● Aちゃん＝小1　五人の中では一番軽度。手の甲をなめ、それを顔にこすりつける動作が間断なく続く。以前は足の指までとのこと。大判と普通判を併用。ⒶとOを学習、かなりきれいに線が書けるようになった。読める漢字は四十ほど。かなり正しい発音ができる。

● T君＝小3　〝貴公子〟然とした風貌。学習面では一番の遅れ。甲高い奇声を発し、言語はほとんどない。目、耳などの顔の部分名称を言わせているが、今のところあまり効果が見られない。

● S君＝小1　小柄で愛くるしい顔、朗らかで人なつこい性格である。T君同様、言語はほとんどない。静かに着席ができ、〝学習〟をすることはできる。顔の部分名称から指導。

● M君＝小1　いたずらっぽい顔がとてもかわいい。以前、ボランティアの会合で、工藤先生になつき、〝別れるのイヤだ〟という風に泣いたという。

五人の子供たちをじっと見ていると、様々な行動形態を示す。しかし、特徴的なのは互いのコミュニケーションがないということ。通常、子供たちが集まると、チョッカイを出したり、ケンカをしたりすることが多いが、彼らは唯我独尊、まわりの動きにあまり気をとられない。

「漢字カード、特に大判は、この子たちのようなハンデを持った子に効果があるように思います。名前が書ける、明確ではないが発声をしようとする。〝耳〟というカードを見せると、手を耳に持っていこうとする。漢字カードの一つの効果が示された感じがいたしますね。

でも、〝効果がある〟と言い切るには、まだ時期尚早でしょう。だって私たちは、ハンデを背負った子どもたちに今、出合ったばかりなのですから」

私たちの〝障害児〟教育は始まったばかり、と工藤先生は力説される。それは何も〝障害児〟に限ったことではない。子供たちをよりよく導くために、自分にこり固ってはいけない、と強調されたかった

のだろうか。

同じ病名でも、一人ひとり違う症状

田中律子先生（大阪／湯里住吉教室）

田中先生は、通常の教室日以外に週二日、月・木曜に、四人の〝障害児〟を指導しておられる。その四人の子供たちの病名はつぎのとおり。

- U子ちゃん＝小5 ダウン症、てんかん、上顎異形、IQ＝27
- K君＝小5 ダウン症、自閉的傾向、IQ＝30
- M子ちゃん＝小5 ダウン症、サリドマイドによる指の異形、IQ＝30
- I君＝小5 自閉症、IQ＝50

プロローグ

以上の病名はそれぞれ、医師および相談員からの診断。現在、全員地元の小学校の養護学級に通っている。この子たちと田中先生の出合いは、五十三年の六月のことだった。もともと、先生と知り合いだったU子ちゃんのお母さんが、あるとき先生に相談をもちかけてきた。

「U子が二十歳になるまでに、何とか、買い物ぐらいはできるようにしてやりたいのです。今までにも家庭教師を頼んだりしてみたのですが、U子のほうが、それらの先生を受けつけません。公文式で何とかならないでしょうか」

ということだった。田中先生はそれまでに、肢体不自由児を四人指導してきた経験はあったが、ダウン症、自閉症児は初めてだった。

「私に、なついてくれさえすれば、なんとかやれるだろうと思い、とにかく子供と会ってみました。U子ちゃんは会うなり、いきなり訴えるのです。

『せんせ、さんすうむずかしい。キライ！』と。それが、不自由な発音ながら、本当に実感がこめられているんですね。ずいぶん算数でつらい思いをしてきたのでしょう。胸が熱くなり、『先生も、むずかしい算数大キライよ。楽しいお遊びでやろうね。一緒にやろう！』と思わず叫びました。そして、一時間ほどU子ちゃんと面接をして、帰りがけに むこうから握手を求めて来たのです。

そのとき『これならできる』と、確信しました。」

〝積木〟と〝漢字カード〟で興味を

その後、U子ちゃんのお母さんの紹介で、七月にK君、九月にM子ちゃん、十一月にI君が入会。指導形式は一対一である。月に二回ほどは他の人との協調性を養うため、四人合同での指導を試みているが、まだ、やはり気が散るそうである。

「まず、どうやって私の身近な場所に座らせるか、ということから始めなければなりませんでした。〝多動性〟というのでしょうか、なにしろじっとしていないのです。この対策には〝かず遊び〟と〝漢字カード〟を使いました。あの子たちがチョコ、チョコ動き回っていても、私ひとりで積木やカードをやっているのです。すると、やがてそれらに興味をもって、近寄ってきます。そこを巻き込んで一緒にやるようにしました」

同じダウン症といっても、一人ひとり違う。積木やカードだけで二か月を費した子もいれば一回めの学習からプリントに入れた子もいたそうである。

以下、四人のうち、もっとも症状が重いU子ちゃんの学習経過を追ってみる。

U子ちゃんの場合

○ 入会時の状態＝一～20まで、数唱も不確か。

〔昭和五十四年六月～八月〕

AAIを見せてもまるで興味を示さない。積木の1～9をとり出し、数唱しながら箱の蓋の上に載せる遊びを繰り返す。また、「数字」、「指の絵」、「○」の積木をセットにする遊びをやる。指は比較的早く理解するが、「○」で少し戸惑う。

積木と同時に漢字カードを使う。「胡瓜」「傘」「葡萄」など、身近なものから驚くほど早く覚える。

十月からは、大判カードを使用したが、従来のものより、さらに興味を示す。二週間後に二十枚全部を覚える。

積木、カードは家庭でも毎日やらせる。

〔九月初旬〕

指導を始めてから二か月目。初めてAAIαの左側だけさせてみる。点線をなぞるのが苦痛のようだ。

点線からはみ出すと神経質に消して直す。一回の学習平均三枚。（0枚のこともある）

〔十月〕

ＡＡ－の数が数えられるようになった。しかし○○は2と書けるが○○がわからない。指の力が極端に弱い。鉛筆をすぐ落とす。４Ｂの鉛筆に紙を巻いて太くしてやる。とても数字が安定してきた。

Ⓐ教材を与えてみるが、点線をなぞるのが苦手なＵ子ちゃんには苦痛らしい。ＡＡ教材に戻す。

〔十一月〕

物を五つまで数えられるようになる。そのことを知った学校の先生が2＋3、1＋4など、〝だして5〟までの問題をやらせたために大混乱。積木、漢字カードは相変わらずお気に入りで、毎日、朝夕に一人で出してやっている。

普通の鉛筆が握れるようになる。

〔十二月〕

ＡＡ11.に入れてみる。1と2の区別はスラスラできるが、3と4を時々混同する。

〔一月〕

一月末までにＡＡ教材を約二百枚学習、そのときの進度、ＡＡ16.。

どうせ、できないという先入観に怒り

「四人だけに関しても、症状は違うし、学習に対する興味もまるで違います。ひとつの事例だけで、公文式はダウン症児に効果的なんだと結論は下せません。また、他の子の事例どおり指導しても、うまくいくとは限りません。でも、効果がどうのこうのは、学者にまかせておけばいいと思います。効果がはっきりしないから何もしないというのでは、あまりにもその子たちがかわいそうです。

理論がどうあれ、物が数えられなかった子が、現実に数えられるようになり、数字が書けるようになっているのです。私たちに、ダウン症という病気が治せるわけではありません。できる可能性のあることを一つでも、二つでも実際にできるようにしてやることだと思います。例えば、覚えられる漢字をなぜ今まで覚えさせなかったのか、本当に腹が立ちます」

田中先生は、学校の養護学級の授業を、自分の指導の参考にと、見学に行ったそうである。

「私の見学させていただいたのは、たまたま、ひどい授業でした。算数の時間でしたが、先生が黒板

に、4＋3＝○と書いて、一人の生徒に当てます。生徒が答えられないと、生徒の手を持って、『4と3が合体するといくつ？　7でしょ！　わかったね』少し極端な表現ですが、大体、この様です。

これじゃ、普通の生徒にだって苦痛です。もちろん、養護学級の先生みんながこの様ではないでしょうが、世間一般でも、『どうせ、できないだろう』という先入観は、かなり根強いようです。

〝障害〟を持った子に接してみますと、普通の子の気持まで読めるようになるのです。生意気な言い方ですが、〝障害児〟教育は教育の原点という感じです。より繊細な神経にふれて、見過ごしがちの子供の気持に気づきます」

4　山東小学校の記録

読書能力は漢字力

島根県斐川町立出東小学校は「学習の基礎能力である読書能力は漢字力だ」と考え、昭和五十一年から漢字教育に取り組んで五年になる学校です。

漢字力の向上には石井式しかないというのが全教職員の一致した意見だと聞き、私は年に一度必ず訪問して先生方と懇談して来ました。

ここには特殊学級があり、柳楽先生が熱心に指導していらっしゃいます。私はこの学校を訪問するたびに、きっとこの学級を訪問し、子供たちにお話をしてやったりしていますので、私の訪問を最も歓迎してくれるのは、この学級の子供たちです。

〝八つの輝く瞳〟の標題の示す通り、漢字を読む喜びを知った障害児たちの目が輝き出すこの事実を、一日も早く、日本中の人々に知って頂きたいと思います。

八つの輝く瞳――重い障害をもつ児と漢字の出合い――

柳楽　寛子

現在、私が担任している学級には四名の知恵遅れの子がいる。その四名のうち、二名は重複障害（ダウン症・脳性麻痺後遺症）である。

このような学級で、当校が取り組んでいる漢字教育についていけることなど考えなかった。我が学級

のトップクラスの子だって、たどたどしい拾い読み、左手で文字を書く関係もあるのか、漢字を嫌い、自分の氏名もかな書きしている。

重複障害のある子は、まだ言葉もあまりなく、自分の名前も書けず、ひとり遊びの段階の子であるから、漢字の読みなんて到底駄目だろう。私は今まで通り、この子らの実態に即した学習を進める方が、この子らが伸びてくれるだろうと思い、日々学習を進めていた。

ところが、『石井式漢字教育革命』（グリーンアロー出版社刊）その他、石井先生の書物を読むうち、この子らも漢字を読む可能性をもっているのではないか。二～三歳児が覚えるのなら、あまりしゃべれず、ひらがなを知らないO君だって同じだろう。幸いお話を聞くことの好きな子らであるから、何げなく、漢字学習に誘い込んでみようと思いたった。

Ⅰ 生活の中へ漢字を

一 教室内に漢字カードを

彼らが毎日手にして遊ぶ物体とか、よく目につく物体に、漢字カードを張りつけた。彼らには一にも二にも関心を持たせ、毎日繰り返しの反復が覚えるコツと思い、遊びながらにも目にふれるよう配慮した。マンネリ化させないように、時々カードの型を変えたり、マジックの文字色を変えたりすることも大切と思う。

現在張りつけている物は、机、黒板、椅子、鞄、戸、壁、戸棚、自転車、靴（上靴に布で）、筆入れ。計十カードである。

二 昔話を聞きながら漢字を

第一回 創作話『太郎ちゃんのお手伝い』

平素のお話と違って、黒板に文字を書くので「オヤッ」という顔をしながらも、話をよく聞き、登場人物と共に「ハーイ」と大きな声で返事をしていた。

第2回 昔話『桃太郎』

お話を始めると、「漢字も書いてよ」と三年I君が催促する。どの子もよく聞いていた。

第3回 昔話『金太郎』



絵本を見せながらお話をする。前回の学習に未練を残している子もいて四人全員の気持がぴたっとせず、O君はお話にのってこず、席を離れたりした。

お話を聞かせる時の雰囲気作りが大切であるし、子供らが興味を持つ話、話術を身につけねばならぬと痛感した。相手が、能力の低い子であればあるほど大切な事であると思う。

第4回　昔話『猿蟹合戦』

三年I君が、「先生、僕、漢字がいっぱい読めーやになったけん、また何かお話ししてごいて（ください）。漢字も書いておっせて（教えて）」と自分の方から言った。

一年K君も「ハヤおっせて、校長先生におっせてあげーと、エライ、エライとほめてござれーよ」と言う。

今日はカードの裏に絵、表に漢字を書いて話を始めた。提出漢字もあらかじめ用意したり、お話を聞く雰囲気ができれば成功と思う。

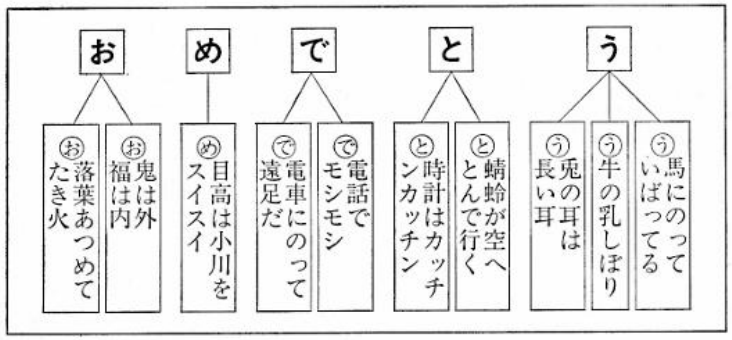
O君とI君……ちょっとつねって痛い痛いと言って〝痛い〟の文字を覚えさせた。

今ではお尻を押え、〝痛い〟の文字を指し、「痛い痛い」と言う。体で感じて覚えたことは長く忘れないだろう。

Ⅱ常掲黒板を利用して

空欄へ簡単な絵を入れる。二週間ぐらいで貼り変える。毎朝唱える。

常掲黒板を利用した掲示（空欄に簡単な絵を入れる）



Ⅲ 漢字カードや昔話かるた遊び

子供たちは楽しんでかるた遊びをするが、すっかり暗記してしまい、一字一字読んでいない向きも見うけられるので、漢字カードで一字一字について、正しい認識をさせることが必要となってきた。

そこで大阪の田中登龍館から出版されている漢字カードを利用している。このカードはよく工夫されていて、利用が容易である。現在は、名詞一、名詞二を使っている。

反省の記

◎ 子供の視覚力のすばらしさには、唯驚くばかりである。自分の氏名はおろか、余り言葉の言えないO君が、大きな声で、ウサギ、サル、キンタロー、サラ、ユーセンと、指す漢字を誤りなく読むのを見て、今まで漢字指導というと押しつけで、興味、関心に関係なく覚えさせようとし、大切な芽をつんでしまっていたのではないか、と思い、そんな自分が恥ずかしくさえなってきた。

四人の子供らは、自分が読める漢字の書いてあるノートを持ち、職員室へかけ込む。そして手あたり次第、先生方が忙しかろうがそんなことおかまいなく、自分のノートを広げ漢字を読み、褒めて貰い、

提出文字とその習得結果（○印が書けたもの）

第1回創作童話の結果

児童名＼提出文字	学校から帰った	太郎	お母さん	大きい皿	電話	有線
1年K	○	○	○	○	○	○
3年I	○	○	○	○	○	○
重度O	×	×	×	○	○	○
〃 I	×	×	×	○	モシモシ	○

第2回昔話の結果

児童名＼提出文字	昔昔大昔	山へ行く	川へ行く	洗濯	川上	大きな桃	桃を切る	桃太郎	犬	猿	雉	宝物	鬼
1年K	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
3年I	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
重度O	○	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	×	○
〃 I	○	×	○	×	○	×	×	○	○	○	○	×	○

第3回昔話の結果

児童名＼提出文字	森の中	金太郎	熊	鹿	兎	猿	栗鼠	相撲	野原	刀	馬	褒美
1年K	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
3年I	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
重度O	×	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	○
〃 I	×	○	○	○	○	○	○	○	×	身ぶり	×	○

第4回昔話の結果

児童名＼提出文字	猿	蟹	柿の実	蜂	臼	栗	痛い痛い
1年K	○	○	○	○	○	○	○
3年I	○	○	○	○	○	○	○
重度O	○	○	×	×	○	×	○
〃 I	○	○	×	○	○	×	○

大喜びしている。忙しくしておられる先生方には大変気の毒に思っているが、本人たちの喜びに免じてお許し願っている。

他学級の上級生が、「すごいなあ――、僕負けた」と言うと、得意そうな顔をして、「先生、僕にもっとおっせて。おかさんの知らん字おっせて……」と張り切っている。

◎「栗」の文字を見て、以前に覚えた「栗鼠」を思い出したのか、一年児が「栗」をリスと言った。まだ文字を余り知らないこの子らに与える文字については、今少し教師の方で考えて提出せねばならないのだろうか。

日常多く使用する文字を提出するのが良いのだろうか。

◎ 三年I君が読んでいた本に狼の文字を見て「せんせ、この字のこっち側（扁のこと）は猿のこっち側（扁のこと）と同じだね。こら仲間かね」と言った。

私はすかさず「えらいぞ。僕はすばらしい漢字先生だ。この字はオオカミという字だよ。サルもオオカミも同じ獣の仲間だよ。また見つけたら、先生にもおっせてよ」と話した。

この子は左ききで、とても不器用であり、漢字を書くのがとても苦手、三年生で入級してきた時は、自分の氏名も漢字で書けない子であったのに、こんなに漢字に興味を持ち、たどたどしい読みから、スラスラ読みへ変身してきた（まだひらがなの多い文章を読むのは、たどたどしい）。

文字が読めるばかりでなく、最近はとみに張り切って、自信がついてきたようである。

◎ 脳性麻痺後遺症のI君は、現在ひらがなを大体全部覚え、書ける漢字も「井上きよ司、いけ田、川上せん生、目、口、土よう」と十文字ある。

ダウン症のO君は、自分の名前は勿論全然書く事も読むこともできないのだが、漢字はI君より早く覚えた。漢字はかなよりやさしかった。